キズナエピソード

遊部 いろは　4話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

プールでの告白がきっかけで、

俺といろはは付き合うことになった。

付き合ったはいいものの、

正直、こういう関係は初めてだから

どうすればいいのか戸惑ってしまう。

いろはもきっとそうなんだろうな……

と思っていたら、

アイツは鼻息を荒くして意気込んでいた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//都立有羽・校門

［いろは］

「はいはーい、とびお、ここで問題でーす。

あたし達が付き合うことになった今、

一番にやらなきゃいけないことはなんでしょーか？」

［とびお］

「え……？　腕をつなぐ……？

デートする……？

キス……？」

［いろは］

「ブブー！　もう。どれもいいけど、全部ハズレ！

あたしたちがしなきゃいけないこと、

それは……報告でーす！」

［とびお］

「報告？」

［いろは］

「そ。報告。

カオリンに、あたし達が付き合いましたよ―って、

報告しなきゃ！」

［とびお］

なるほど。俺たちは花織と3人でつるんでいたんだ。

きちんと報告しておかないと

仲間はずれにしてるみたいんだもんな。

［とびお］

「いろははしっかりしてるな。見直したよ」

［いろは］

「えへへ～。

じゃあ、さっそく昼休みにカオリンに話そっか」

//暗転

//都立有羽・教室

［とびお］

そして昼休み。

俺といろははいつものように花織を誘って

3人で一緒に昼食を食べていた。

［花織］

「……いろは、なんかあった？

妙にそわそわってしちゃって。

なんか嬉しそうだし……何企んでるの？

［いろは］

「えへへ。

実はカオリンに重大なことを伝えたいのです！」

［花織］

「重大なこと……？　え、なんだろ？」

［いろは］

「実はぁ……。

あたしととびお、付き合うことになりました！

パンパカパーン！」

［とびお］

花織の顔が固まった。

しばらくして、素っ頓狂な声が上がる。

［花織］

「え？　え？　えぇー!?

いろはが？　とびおくんと？　付き合う？

ホントに？　嘘でしょ!?」

［いろは］

「ちょ、ちょっとかおりん。

いくらなんでも、驚きすぎ」

［花織］

「そりゃ驚くよ！

だって、あのいろはが恋愛だよ!?

恋愛のれの字も知らないようないろはが……！」

［とびお］

「……そりゃもっともな意見だ」

［いろは］

「えー!?　2人ともひどいよー？

あたしだって、女の子なんだからね！」

［とびお］

いろはが子どものように頬をぷくっと膨らませる。

そんな拗ねた顔もまた可愛かった。

［いろは］

「そういえばさ、カオリン。

今日の放課後はどこ行く？

もう一回、背徳のカップケーキ、行ってみる？」

［花織］

「んー。いや、ウチは今日は良いや。

なんか2人に悪いし……」

［いろは］

「え？　あたし達に悪いってどういうこと？

あたしは全然悪いなんて思ってないよ？

とびおもそうだよね？」

［とびお

「あぁ、まぁ」

［いろは］

「ほら、問題ないよ。

カオリンも一緒に遊びに行こー」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

いろはが楽しそうに腕を上げる。

それを見て、花織は俺の肩をぽんぽんと叩いてくるのだった。

「なんていうか、付き合ってもあんまり変化ないね。

　っていうか、このノリっていつもと同じじゃん」

//次ページ

「キミたち付き合ってるって言えるの？」

「いや、まぁ俺はそのつもりだけど」

俺が苦笑交じりで答えると、

花織はため息とともに同情の視線を俺にくれた。

「やっぱりいろはに恋愛は、まだ早かったのかもね。

　とびお。これから苦労するだろうけど頑張って」

//ADV形式終了

//4話END